



2012 年度  
アンコール遺跡整備公団  
インターンシップ報告書

金 沢 大 学

アンコール遺跡整備公団インターンシップ実施委員会

2012 年 12 月



1



2



写真 1 . 始業式前に公団本部玄関にて（後列左から，畠中瞳，宮田あゆみ，中村慎一理事，笹田絵美，高橋春香，村上清敏国際学類長，前列左から，河合柚，松原綾，佐々木香菜，中谷容子，熱野華菜）。

写真 2 . 整備公団クン・クンニエ副総裁による始業式後のセミナー。カンボジアの歴史やアンコール世界遺産について学ぶ。

写真 3 . 業務地へは担当職員とともにバイクで移動（グループ 2）。

写真 4 . 業務終了後はその日のうちに報告書をまとめる（グループ 3）。

3



4





写真1 . エコビレッジの視察 (グループ1 , 2 ).  
写真2 . クメール民族センターの視察 (グループ1 ).  
写真3 . ロリュオス遺跡群のバコン寺院の視察 (グループ1 , 4 ).  
写真4 . 付属シハヌーク博物館の見学 .  
写真5 . プノン・ボクでの業務 (グループ1 ).  
写真6 . エコビレッジでのランチ (グループ1 , 2 ).



写真 1 . 休日に全員で訪れたトンレサップ湖 .

写真 2 . 遺跡整備公団でのすべての業務が無事終了 .

写真 3 , 4 . 受入責任者のハン・プウ副総裁と最終面談するグループ 2 (写真 3 ) とグループ 3 (写真 4 ) .

写真 5 . お世話になった公団職員のみなさんとの昼食会 .





学生たちの業務地（グループ1：ルン・タ・エク，グループ2：クメール民族センター，グループ3：西バライ，グループ4：北バライ）。

## 2012 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ報告書

### 目 次

1 . はじめに	村上清敏 . . . .	1
2 . The Third Internship Programme	Hang Peou . . . .	2
3 . Kanazawa-APSARA Co-operation	Khoun K-N . . . .	3
4 . インターンシップの成果と今後の課題	塚脇真二 . . . .	4
5 . 参加学生たちの報告		
1 ) カンボジアでのインターンに参加して	松原 綾 . . . .	7
2 ) 現地で得られる経験の大切さ	河合 柚 . . . .	10
3 ) インターンシップで得たもの	宮田あゆみ . . . .	13
4 ) カンボジアでのインターンシップだからこそ得られたもの	中谷容子 . . . .	16
5 ) カンボジアでの経験から	笹田絵美 . . . .	19
6 ) 世界遺産とカンボジアから感じたこと	熱野華菜 . . . .	22
7 ) さまざまな体験をした 2 週間	高橋春香 . . . .	25
8 ) 2 週間 , カンボジア生活	佐々木香菜 . . . .	28
6 . チューターの報告 : 3 度目のカンボジア	畠中 瞳 . . . .	32
7 . 資料 : 2012 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップの概要	塚脇真二 . . . .	34

図版 1 : インターンシップ初日の始業式と公団職員との打合せ .

図版 2 : インターンシップでの現場業務のようす .

図版 3 : 休日とインターンシップ最終日 .

図版 4 : アンコール遺跡世界遺産公園における各グループの業務地 .



## 1. はじめに

金沢大学人間社会学域国際学類長 村上清敏

今年度も、一昨年、昨年に引き続いて「アンコール遺跡整備公団インターンシップ」を実施しました。公団の受け入れ学生数は、初年度は12名でしたが、昨年以来その数は8名となりました。人間社会学域の学生8名（人文学類1名、経済学類2名、学校教育学類1名、国際学類4名、すべて女子学生）+チューター1名および村上は8月18日早朝に金沢を出発し、中部国際空港からインチョン空港経由で、当日深夜にシェムリアップ空港に到着しました。空港では、本インターンシップの企画・立案に初年度から深く関わってくださっているばかりか、管理委員会「顧問」の肩書もお持ちで、カンボジアが第二の故郷とおっしゃる、環日本海環境研究センター教授の塚脇真二先生が準備万端整えて、私どもを迎えてくださいました。塚脇先生のお仕事を10年にわたって支えているドライバーのペンさんも一緒でした。中部国際空港から合流してくださった中村慎一理事、塚脇先生、学生8名+チューター1名、村上ペンさんが運転する車に乗り込み、途中のコンビニでペットボトルの水を含む必要最低限のものを購入した後、それぞれのホテルに投宿したのでした。

インターンシップそのものは、月曜日の20日から開始され、それぞれ自己紹介をおこなった後に、学生は担当者との打ち合わせ、中村理事、村上はHang Peou 公団副総裁の説明を受け、午後には、Bun Narith 総裁への表敬訪問も実現しました。総裁には、本インターンシップが、金沢大学の学生にとっては、とても大きな意味を持つプロジェクトであり、ご迷惑かもしれないが、今後も継続していただきたい旨、中村理事が話され、総裁は、本インターンシップが公団そのものにとっても意味のあるプロジェクトであると言明され、引き続きご尽力くださるとのことでした。

学生諸君のとても旺盛な（食欲と）好奇心、暑いさなか、現地調査に携わる姿を確認し、また、副総裁からの「学生は、とても熱心にやってくれている。頭脳明晰で勤勉である」との（おそらくは、社交辞令まじりの）お褒めの言葉を確認した後、中村理事と村上は一足先に帰国しましたが、その後も、塚脇先生からは、連日、（食事風景を含む）たくさんの写真とともに、詳細な報告を受けておりました。学生諸君の旺盛な（食欲と）好奇心は、最後までとどまるところを知らなかったようです。

これから、公団のHang Peou 副総裁およびKhoun Khun-Neay 副総裁のごあいさつ、塚脇先生による「インターンシップの成果と今後の課題」と題した今年度の本プロジェクトの総括と展望に引き続き、学生諸君それぞれの現地での調査報告、さらには、今回もチューターの役割を見事にこなしてくれた畠中瞳君の「チューターの報告」と続きます。どうぞ、ご一読くださり、ご意見、ご感想をお聞かせくださるとともに、本インターンシップへの変わらぬお力添えをお願いいたします。

## 2. The Third Internship Programme

APSARA National Authority  
Deputy Director-General Hang Peou

Regarding to an excellent research result of the programme Environmental Research Development in Angkor, Cambodia (ERDAC Programme) made between APSARA National Authority of Cambodia and Kanazawa University of Japan, both parties decided to have a MoU (Memorandum of Understanding) for their further cooperation. On behalf of the ERDAC Programme, we, Professor Shinji Tsukawaki and I, have tried to find best way to transfer knowledge, technology and culture of both countries to our young generation. This Internship Programme is one of exchange programmes created by the Team ERDAC. The main purpose of this programme is to let students understand APSARA's various missions, Khmer cultures and daily life of local people in the Angkor Park and as the whole in the province of Siem Reap.

In the first year of 2010, APSARA welcomed twelve students for fifteen days, they were divided into six groups, and each group attended two different projects to study during their stay. We spent much time for preparation not only the staffs of Water Management Department, but also other related departments such as Land and Habitat Management Department, Culture and Standard Norm Department to support the works. All staffs from those departments were very happy to share their daily local works with the students.

In the second year of 2011 and the third year, we decided to reduce the number of students from twelve to eight. Participated students in each year were divided into four groups and worked on four projects respectively through their stay. At the end of the programme, we made an evaluation for each group. This evaluation can give feedback on how we can improve our internship programme in the future, and from year to year, we can see the improvement of the student's knowledge on the this project. Moreover, we (my staffs and I) also found that all students were active, creative and kinds. Especially the students of this year were very good manner. I am happy that they have left us such splendid gifts.

I do appreciate for the good cooperation between internship students and my staffs for the past three years, and I wish such good cooperation and interchanges of personnel between APSARA and Kanazawa University should be continued forever.

### 3. Kanazawa-APSARA Co-operation

APSARA National Authority  
Deputy Director-General Khoun Khun-Neay

This is the third year that students from Kanazawa University come to an internship to Angkor, under the co-operation agreement with the National APSARA Authority. I am always been asked to deliver an introductory lecture of about the works of the APSARA National Authority to the group of students. I do this with a great pleasure because the students are always attentive and interested to know about the management of the Angkor Park and the on-going projects on the site. My staffs participate in the guiding tours to show the projects to the students.

This kind of exchange is very fruitful for both sides. The Japanese students have the opportunity to learn more about the life of the people of Angkor areas, to see real works on the site. For the APSARA side, the young staffs are very happy to show and discuss with outsiders about their works. Sometimes Japanese students suggest to us very useful ideas.

We are always very serious in the job, but we also are very joyful when the job is finished, as everyone could see in this picture below.

I hope that the exchange of students between Kanazawa University and APSARA Authority will continue and so we will have the opportunity to work together again.



昼食会後に Hang Peou (左) と Khoun Khun-Neay (右) の両副総裁と

## 4．インターンシップの成果と今後の課題

環日本海域環境研究センター 塚脇真二

### 1．はじめに

カンボジアのアンコール遺跡整備公団（略称アプサラ公団）での学生インターンシップも今年度で3回目の実施となる。大成功のうちに終了した昨年度の経験と実績をふまえつつも、財政上の理由から支援体制を縮小してのぞんだ今回のインターンシップだったが、公団職員たちの手厚い指導と学生たちの積極的ながらも節度ある行動とによって順風に帆をあげるように全予定を終了することができた。公団や本学の関係諸氏に心からの謝意をまず表したい。

以下、今年度のインターンシップの概要、現地での活動と成果、そして今後の課題について記述する。

### 2．インターンシップの概要

参加学生の募集からインターンシップの実施にいたるまでの日程などは巻末の資料を参考されたい。今年度の参加学生は、国際学類3年生4名、経済学類3年生1名、人文学類、経済学類、学校教育学類の2年生各1名の計8名でありすべて女子である。学生たちは昨年度と同様に2名ずつの4グループに分かれ2週間をとおして同じ業務に従事した。今年度の参加者たちも、協調性や積極性、社交性などのすべてにわたって申し分のない学生たちだった。

昨年度のインターンシップにチューターとして参加した国際学類4年生1名を今年度もチューターとして同行させた。チューターの業務は、現地での生活や公団での業務にかかる参加学生たちの相談相手、学生たちと公団あるいは筆者との間に入っての連絡や時間調整、学生たちの安全管理の補助と多岐にわたるものであったが彼女はこれらを的確にこなしてくれた。また、本学の中村慎一理事ならびに村上清敏国際学類長には公団への挨拶もかねて実施期間の第一週目に現地を訪問いただいた。

しかし、事務職員の派遣やアンコール遺跡世界遺産環境調査チームに所属する他大学若手教員たちの時期を合わせての現地調査は経費の都合上見送られた。大学と参加者たちとの緊密な連絡体制の確立や万一のときの支援体制の確保という点でこれは不安を残すものであったが、幸いにもそのような不測の事態が生じなかったためことなきをえた。

今年度のインターンシップ参加学生たちも日本学生支援機構の支援金8万円受け取っている。この支援金によって学生たちの経済的な負担を約半分に減らすことができた。

### 3．現地での活動と成果

このインターンシップの成果は昨年度と同様、以下の3点に集約される。学生たちへの

「教育効果」、成果の「現地への還元」、そして本学の国際貢献にかかる「周知（宣伝）」である。昨年度の報告とほぼ同じ記述となるが以下に列記する。なお、現地での活動の委細については学生たちの報告をご覧いただきたい。

（１）学生たちが大きな満足と大きな経験とを確実に持ち帰ることができた（教育効果）。華やかに喧伝されるばかりの世界遺産であるが、その維持管理や観光客の便宜のためにどれほどの労力がその裏側で費やされているかを公団での業務をとおして参加学生たちは実体験することができた。また、昨今のはやりの言葉である「持続可能な・・・」のために、どれほどの苦労がその背後あるのかも身をもって経験した。「最初のイメージとは大きく違っていた」とは今年度も多くの学生から聞かされた感想である。これとともに「貧しい発展途上国」というイメージが先行するカンボジアのくったくのない人々や豊かな自然に学生たちは日々触れることもできたし、さらには国際協力の舞台であるとともに地域住民が暮らすアンコール世界遺産公園の特異性を目の当たりにした。「国際貢献」と「地域社会」という２つのキーワードに学生たちはふれたことになる。後掲の学生たちの報告にはこの２週間の体験が生き生きとつづられている。したがって、インターンシップの２週間は学生たちにとってきわめて充実したものだったと客観的に評価されよう。これはこのインターンシップの実施が学生たちへもたらした大きな教育効果といえる。

（２）学生たちを指導することによって公団職員に大きな教育効果をもたらした（現地への成果の還元）。参加学生たちはそれぞれの業務の担当職員たちとともに公団の通常業務に従事した。学生たちの同行が彼らの業務の支障になった点はいないが、インターンシップ終了後に公団上層部から、学生たちの存在が職員たちに大きな教育効果をもたらしたことを昨年度同様に感謝の意とともに指摘された。具体的には、１）学生たちを案内することで職員たちの「説明」の技術が向上したこと、２）職員たちが説明する「楽しみ」や「喜び」を味わったこと、３）業務についての全般的なことを学生たちに説明することで、職員たち自身が業務内容を「総括」することができたこと、である。

（３）学生たちの活動がアンコール世界遺産公園で大きな話題となった（宣伝効果）。安全管理の観点から、参加学生たちはアンコール遺跡整備公団の制服を着用して日常の業務に従事したが、カンボジアではエリート集団として知られる同公団の制服を日本人の学生たちが着用するのはきわめて目立つものであり、現地の人々や日本語観光ガイドたち、彼らが案内する一般日本人観光客におおいに注目された。参加学生たちが制服の右腕に本学のロゴをつけて業務にのぞんだことも効果的だった。したがって、このインターンシップはアンコール世界遺産における本学の国際的な貢献活動として宣伝効果をあげたといえよう。

#### ４．今後へ向けての問題点と解決案

インターンシップ期間ならびにその後の渡航において、公団側受け入れ責任者であるハン・プウ副総裁ならびに公団担当職員たちと、次年度以降のインターンシップにむけての改善点などを協議した。２度の実績をふまえての本年度のインターンシップであっただけ

に安心感をもって実施することができたといえる。この点は公団側もまったくの同意見であった。3年連続しての成功によってこのインターンシップを実施するための基礎と実績は十分に確立できたといえよう。しかし、これを長期的に継続するとなると問題がまだまだ残されている。

今年度のインターンシップには経験豊富なチューター1名を同行されることができたし、筆者も現地支援のためインターンシップの実施にあわせてアンコールでの調査活動期間を設定した。しかしながら、不測の事態の発生にそなえての複数名のチューターの配置や事務職員の派遣といった二重の支援体制をとっていた昨年度と比べると、今年度のチューターや筆者の精神的かつ身体的な負担はかなりのものとなった。また、筆者本来の渡航目的であった現地での調査研究活動には支障が生じた。実施責任者としての筆者への負担は当然のことととらえているが、本来の用務に支障がでるほどの事態はさけないものである。このインターンシップで得られる成果の大きさを参加学生ならびに本学の双方で考えると、学内における経済面ならびに人材面での継続的支援体制の確立がのぞまれる。

次に、上記に関連することであり、昨年度にも指摘したことであるが、このインターンシップは筆者と遺跡整備公団との長年にわたる信頼関係のもとに実施されている。また、企画調整の段階から現地支援、実施後の報告会の開催や報告書の作成も筆者がほぼ担当している。すなわち筆者に万一の事態が生じたときやインターンシップにあわせての渡航が不可能となったときにはこの企画が中止となることが懸念されるが、すでに全学的な企画となっているこのインターンシップの実施が個人の事情に左右されることは避けるべきである。しかしながら、筆者のかわりがつとまるだけの人材は現在の本学には存在せず、そのような人材の短期間での養成は不可能といえる。この問題のとりあえずの解決策となるのは、同じく公団の信頼を得ている研究チームの若手メンバーたちが所属する大学との連携、たとえば合同インターンシップやスタディツアー、現場実習などとの組み合わせなどであろう。

世界有数の文化財であるとともに国際社会と地域社会とが共存するアンコール世界遺産でインターンシッププログラムを実施しているのは本学のみである。参加学生たちへの大きな教育効果が実現され、かつ成果は現地へ確実に還元されている。本学の国際的な活動としての宣伝効果も十分にある。前掲の Hang Peou ならびに Khoun Khun-Neay 両副総裁の寄稿にあるとおり、公団側も学生たちをきわめて好意的に受け入れてくれており、このプログラムの末永い継続を強く希望している。このプログラムをさらに発展させるべく今後も尽力したいものと思うし、本学内外の関係諸氏のさらなる厚意と理解にも期待したい。

## 5 . 参加学生たちの報告



## 1) カンボジアでのインターンシップに参加して

人間社会学域国際学類3年 松原 綾(グループ1)

私は、8月18日~9月1日までの約2週間、カンボジアアンコール世界遺産インターンシップに参加させていただいた。そもそも、このインターンシップに参加しようと思ったきっかけは、自分が国際学類のアジアコースに所属しているため、アジアの国々に興味があり、特にカンボジアは行ったこともないし、実際に行ってもどのような国か見てみたいということが大きな動機であった。また、もうひとつのきっかけとして、私は去年1年間、韓国で交換留学をしており、近年カンボジアでは韓国企業の進出が進んでいると耳にしたため、さらに興味深かったからである。

このインターンシップに参加する前は、カンボジアがどのような国であるのか、私はまったくと言っていいほど無知だった。ただ、日本のメディアの影響か、貧しい国だというイメージのみを持ってこれに参加した。

インターンシップ初日、それぞれのグループが4つのエリアに分けられ、就業体験がスタートした。私は参加前から希望であった、ルン・タ・エク・エコビレッジを担当させていただくことになった。ルン・



写真1. プノン・ボクに登る

タ・エク・エコビレッジとは、伝統的な村落再生を行うプロジェクトのことである。アンコールワット遺跡群はとても広く、それだけでなく、その敷地内には現在でも数々の村が存在し、人々が生活をしている。観光客が遺跡を訪れるたびに、村人たちのリアルな生活が垣間見られ、非常にめずらしい光景であり、アンコールワットを訪れる一つの魅力だと言える。

ところが、これには問題が発生してきている。近年のアンコールワット遺跡の観光地化や開発が進むことによって村の人口は年々増加しつつあり、また、環境汚染などの問題もあがっていると言われている。そこで、計画されているのがルン・タ・エク・エコビレッジにおける伝統村落再生プロジェクトである。アプサラ公団(アンコール遺跡整備公団)は、遺跡保護や文化を保護するため、この遺跡内に住む村人の家の数を制限したいと考え、結婚後など、新しく家を建てようとするような人々や、今まで家族と一緒に住んでいたが、今後独立するといった比較的若い家族を主な対象として、彼らにルン・タ・エクという遺跡公園外の地域に住むことを勧め、遺跡内の人口増加を防ごうとしているのである。ルン・タ・エクに住む家族には、アプサラ公団が無料で家を建てる材料や日用品などを提供して

いる。

また、エコビレッジの名前の由来のように、ルン・タ・エクは非常に環境に配慮した村づくりをしようという計画がなされている。風力発電やソーラーパネルを取り入れて電気を供給しているのである。また、村人たちの収入源となる農業も積極的に取り入れている。また、このルン・タ・エクを観光にも活かし、観光客が訪れることができるようにするという計画もある。

私は、初めにこのルン・タ・エクのプロジェクトを聞いた時、なんて画期的なプロジェクトなのかと感じた。遺跡の保護をしつつ、人々の暮らし、村人の伝統的な生活を守る新しい村作りをするなんて、よく考えられたプロジェクトだというように感じた。

しかし、ルン・タ・エクに実際に訪問してみると、私が予想していた以上にこのプロジェクトは難しいものなのだということが分かった。新しい村をつくると言っても、もともと農業にも何にも使われてなかった土地を開発して家を建て、農業用の土を移動させたとしても、そう簡単に農業がうまくいくとは限らない。何十年、何百年という月日を経て、村というものは少しずつ出来あがっていく。人々はやはり住み慣れたもとの村を選ぶため、なかなかルン・タ・エクには住民が増えない。また、カンボジア経済が貧しいために、家や村の開発もなかなか進まないのので、このルン・タ・エクにはいまだに市場や病院もなく、人々がのびのびと住めるようなインフラ整備が完成していない。一口に村作りといっても、人々が住みなれた村を同じように作るには莫大な時間とお金がかかる。そして、このルン・タ・エクはアンコールゾーンから遠く、シムリアップの中心地からはバイクで40分もかかる距離にある。これらが、人々が簡単に移動しようとは考え難い理由だと考えられた。

このように、ルン・タ・エクは、村人の環境やカンボジア経済の関係によって複雑な多くの問題や改善点がある。このインターンシップの最終日には副総裁のプウさんとも面談をしたが、彼もルン・タ・エクが抱える問題点や今後について、時間とお金をかけ、ずっとアプサラ公団が向きあっていかなければならないプロジェクトだというように語っておられた。この2週間、ルン・タ・エクのエコビレッジプロジェクトに参加させていただき、



写真2．ルン・タ・エクの視察



写真3．村の子どもたちと

一つの計画には様々な考慮が必要で、何かを達成するには何かを犠牲にするかもしれないし、その度にまた問題は発生するし、それを一つ一つ地道にこなしていくのが何よりも大切なのだと強く感じられた。

また、この2週間、業務中は英語を使って会話をしなければならなかったが、自分の会話力のなさに愕然としてしまった。伝えたいことがあっても、英語で表現できないために、悔しい思いを何度もした。やはり、

いかに英語を使えることは大切なのかということを感じた2週間であった。今回のインターンシップをきっかけに英語の学習に今まで以上に力を入れたいと感じた。

そして、わたしがこの2週間で印象に残っていることがもう一つある。先ほど少し述べたように、私は日韓関係や韓国の企業に関心がある。インターンシップ参加前に知人や家族から、カンボジアでは韓国企業が近年進出していると耳にしていたため、どのようなものなのか知りたかった。実際、この2週間で今の韓国企業がどれだけ多く進出しているのが目に見えて分かった。同伴の塚脇先生から何度もお話を聞いたが、韓国の中小企業の森林開発によってカンボジアの環境が大幅に壊されているということだった。私は、このような事実をまったく知らなかったので、驚いたと同時にすごくショックを受けた。だが、世界ではこういった現実が実際に起きているということを現地で見ることができてすごく良い体験になったと思う。

今回のインターンシップを通じて、感じたことはたくさんあるし、自分自身世界を見る目が変わったと思う。視野が広がったようにも感じるし、良くも悪くもカンボジアの現状というものを見ることができた。このように、海外に目を向け、実際に行ってみるということはやはり国内だけでなく世界に目を向けることが出来るし、今後の学習や将来に向けても良い経験になることは間違いない。この2週間のインターンシップでの貴重な体験を今後を活かし、残りの学生生活、そしてこれからの自分の人生にうまく役立てていきたいと思う。



写真4 . モデルハウスで説明をうける

## 2) 現地で得られる経験の大切さ

人間社会学域学校教育学類2年 河合 柚 (グループ1)

私が今回この海外インターンシップに参加しようと思ったのは、1年次に受けた講義でカンボジアの話聞いたことがきっかけだった。世界中から訪れる観光客数が増加しているアンコール遺跡公園は世界文化遺産でありながら、その中には住民もいて、人々はそのような状況とどのように向き合いながら暮らしているのか、実際に自分の目を通して見たいと思った。現地へ行ってみると、観光客が多くいる一方、遺跡公園内で生活している住民の姿も見ることができた。ここから、観光客が増え、さらに観光地化のため人口過密状態になり、大気汚染、環境破壊が懸念されていることを見てとれた。このような現状を改善するための方法の一つとして、エコビレッジでは具体的にどのようなことをしているのか、非常に興味があった。

現地での業務では、興味があったルン・タ・エクというエコビレッジの設営、維持管理という業務につくことができた。ルン・タ・エクは、遺跡公園内に住む新婚家族を移住させてつくっていく村だ(写真1)。そこに建てられる家屋は伝統的なクメールの家と定められており、無料で提供される。発展していく中でも、クメールの伝統を守っていくことに重点を置いている。結婚した若い夫婦は、新しい家を必要とするし、これ以上遺跡公園内の人口が過密化しないためにも、遺跡公園外につくられることは良い方法だと感じた。さらに、この村では、化石燃料や化学製品などに頼らないで、太陽光発電や風力発電などの再生可能なエネルギーを用い、生物多様性を重視した自然環境にすることを目指している。エコビレッジは、まさに私が想像していた素敵な村だと思った。

しかしながら、ルン・タ・エクを視察していくうちに、問題点もあることに気づいた(写真2)。まず、この村はシェムリアップの中心からかなり離れていることだ。そのため、働く場所がなく住みつきにくいのだ。それに加え、病院や人々の生活になくはないマーケットもできていない。インフラ整備も十分ではなかった。他にも、その土地の土は痩せているため、長



写真1. ルン・タ・エク エコビレッジ



写真2. ルン・タ・エク視察の様子

くはもたないだろうとも言われている。人々を移住させること、伝統を守るといことがいかに難しいことかということがわかった。エコビレッジという良い響きだけでなく、実際にうまく機能するには莫大な資金や時間が必要になるが、いつかそれが実現すればいいなと思った。

また、公団職員の方に、エコビレッジを観光地化するためにはどうすればよいかと意見を聞かれた。アンコールワットやアンコールトムなどに観光客が集中しているため、そこからどのように観光客を分散させるかということも課題となっているからだ。そこで気になったことは、観光客を分散させたいわりには遺跡公園内にある村の情報案内が乏しいということだ。観光客の割合を国別にみると、中国、韓国、日本が多いが、情報案内の看板は英語かクメール語のものがほとんどだった。このため、中国語などでの案内を加えてはどうかと提案したが、受け入れてもらえなかった。公団側としては、団体会で大勢が来て遺跡内の自然環境などが悪くなるのをよく思っていないということだった。しかし、カンボジア政府はお金がないから観光客をたくさん招いていくべきなのではないかと食い下がった。だが、そのようなことは望んでいないようだ。お金がないのは確かだが、クメールの人々の生活環境、インフラ整備が先でゆっくりと開発する方を選ぶようだ。段階的に開発を進めていくのは理想だが、それを続けていけるか、そこに住む人々の理解を得ることができているかなど様々な問題点がある。



写真3．遺跡公園内の村の様子

それでも、ひとつの決めた方針に向かって尽力する姿勢に仕事の熱意を感じることができた。



写真4．遺跡公園内の村のマーケット

このような対話を通し、その仕事に対して、どれだけ現状を改善できるか、自分に何ができるか、と考えていつも向上心を持っていることが何よりも大切なことだと感じた。良いものを求めていくことの楽しさや困難さ、様々なことを含めて、そこに自分の生きがいを感じる事が、働くということなのだ。今回の経験で感じ取ることができた。そして、村づくりにはこれだ、という決まった答えがないが、そのようなことから逃げずに、正面から向き合うことの難しさを改めて知ることができた。ゆっくりではあるが、そのことに対して何らかの解決策をと様々な方法を試そうとする姿勢も改善していこうとするためには不可欠だと思った。話し合いは、解決策などを考えていく過程で最も重要なことだと

改めて感じた。

この2週間で、今、私ができることは何かと考えることも大切だが、考えるだけでなく自分の考えを他人と話し合う力をつけていかなければならないと考えられた。その第一歩として、自学自習活動とされている、教師になるためノートの仲間との意見交換から学ぶという項目があるが、インターンシップで学んだ、答えがなくても多方面から考えていくということを実践していこうと思う。自分は考えたことを他人に表現する力がまだまだ不足していると改めて感じたので、その部分を強化していきたい。また、職場の中で、自分の意見を述べるができる力が私という存在にもつながっていくのではないかと考えた。

最後に、私は今回の海外インターンシップ経験で得られたものとして一番心に残っているものがある。それは、自分が無意識のうちに持っていた固定的な考えがあることに気づけたことだ。他国の人にはやはり育った環境が違うから考え方が違うだろうなと思っていた。しかし、全く違うわけではなく、良くしよう、改善しようとして進んでいく、また、自分の国に誇りを持って生きている、など社会の中で暮らしている同じ人間なのだと感じる事ができた。そ



写真5 . 公団職員との話し合い

れに加え、資本主義経済が主流の今日においてそれぞれの国が直面する課題は、一国の問題に限らなくなっていることもこの経験を通して実感した。これは、現地に行ったからこそ得られたものだと思う。

今日、インターネットなど、いつでもどこにいても、他国の人とつながることができるような社会になったのは便利である。しかし、実際に見たり聞いたりするために、そこへ行くことが何よりも大切なことだと感じた。これからも、自分が知りたいことなどあれば、可能な限り、積極的に自分で足を運んで多くの経験を積んでいきたいと思う。

### 3) インターンシップで得たもの

人間社会学域国際学類 3年 宮田あゆみ(グループ2)

私は歴史的建造物を見ることが好きなのと、それらの保護や修復活動に興味をもっていため、今回カンボジアでのインターンシップに参加しました。

まず始めに、現地での業務で学んだことや得たものについて述べたいと思います。現地では4つのグループに分かれ、2週間業務を行いました。私のグループの担当の職員の方は住居の専門の方で、その方からクメールの伝統的な住居についてその構造や建築材料、人々のそこでの生活などについて学びました。クメールの伝統的な住居は、構造は比較的簡素な造りですが、カンボジアの暑い気候の中でも涼しく過ごす工夫など環境に適した部分がいくつもありことを知りました。また暑い日中は壁のない1階で過ごし、2階は夜寝る時だけに使うなど、クメールの人々の生活にも様々な工夫がありました。実際に人々が住んでいる村を訪問し、その工夫を自分の目で見たり涼しさを体感出来た時はとても感動しました(写真1)。



写真1 . Lvea Village 訪問

こうした体験から私は、自分の価値観のみをもとに国際理解を行うことの怖さを感じました。おそらく写真を見るだけであつたら貧しさゆえにこうした構造なのだろうなどと考えてしまっていたと思います。しかしそこにはその国ならではの工夫や知恵がたくさんありました。そうしたことを知らずに自分の価値観のみによって理解したつもりになるのは大きな間違いであると気付きました。これは今回海外でのインターンシップに参加して得られた教訓であり、今後国際理解を深める際にはこの教訓を強く意識していきたいと思います。そしてこの教訓から、異文化に触れたり外国の人と話をしたり、新たなことにチャレンジをしたりするなどして、自分がどういう価値観をもっているのかを知ったり、自分の視野を広げようとするのがとても大切なことであると思いました。今後の大学生活においてより積極的に自分から行動して、自分自身を成長させたいと思います。

クメールの住居について学んだ後に私たちは Khmer Habitat Interpretation Center という施設を見学しました(写真2)。ここはクメールの伝統的な住居や人々の生活について紹介をしている施設です。アンコール遺跡群は、世界遺産内で現地住民の方々が生活を営んでいるという特殊な世界遺産です。そのため、観光でアンコール遺跡群を訪れた人は自然と現地住民の方の生活を目にすることが出来ます。異文化を理解する上で現地住民の方の

生活を知るといのは上記でも述べたようにとても大切なことだと知りました。この施設に今後多くの観光客が訪れ、クメールの住居や人々の生活について知ってもらえると嬉しいです。

次に今回のインターンシップで私が実感したのが自身の英語力の未熟さです。英語で業務を行うことに対して出発前から不安を感じていましたが、やはり最初は自分の言いたいことがうまく英語に出来な



写真2．クメールハウスの模型

かったり、発音の違いに戸惑うなどしてなかなか円滑にコミュニケーションをとることが出来ず、悔しい思いをたくさんしました。それでもこちらが伝えよう、理解しようと必死になれば職員の方たちも辛抱強く待って下さったり、何度も繰り返して説明をして下さり、そうしたコミュニケーションによって段々とお互いの仲を深めることも出来ました。お互いに笑顔で会話が出来た時は本当に大きな喜びを感じました。しかしそんな喜びを感じることが出来たからこそ、自分にもっと英語力があればより多くの会話をしてお互いの色々な思いを伝えあうことが出来るのにと、自分の英語力不足を改めて痛感させられました。今回感じたこの悔しい思いを糧にして、今後社会に出て活躍するためにも自身の英語力をより高めていきたいと思います。

次に、インターンシップに参加して職場から感じたことは、アンコール遺跡整備公団の職員の方々の、自分たちの仕事に対する熱意や誇りと、自分の国に対する愛情です。職員の方々にアンコールエリアを案内していただくことも何度かありましたが、彼らはどんな小さな遺跡についてもきちんと知識を持っており、その遺跡がいつ誰によって建てられたものなのか、そこでは今どの国がどんな修復作業を行っているのかなどを私たちに説明してくれました（写真3）。



写真3．アンコールワット

またクメールの住居について学んだ際は、職員の方々のクメールの住居を誇りに思う気持ちや、その伝統を多くの人に知ってもらいたいという強い熱意が伝わってきました。このように私は職員の方々が自分の国に愛情をもち、自国の文化や伝統に誇りをもち、またアンコール遺跡を管理する自分たちの仕事に誇りをもち、日々の仕事に取り組んでいることを2週間の業務を通じて感じ取ることが出来ました。私はまだ将来自分がどんな職業に就

くかは明確には決めていませんが、アンコール遺跡整備公団の職員の方々を見て、やはり自分がやりがいを感じる事の出来る職業に就きたいと強く思いました。それは簡単に見つかるものではないと思うし、社会はそんなに甘いものではないのかもしれませんが、自分なりにやりがいを見つけて働くことは出来ると思うので、その努力はしたいと思いました。

カンボジアでの2週間のインターンシップを通じて私は本当に多くのものを得ることが出来ました。それらは全て今後自分を成長させるための糧になります。このインターンシップは一般企業へ出向いて行うインターンシップとは業務内容などもかなり異なるものではあると思いますが、文化や人々の考え方も大きく異なる海外において現地の方の仕事の間近で見るといのは本当に貴重な体験であるし、日本の一般企業でのインターンシップとは

また違った仕事に関する見方というものも得られるのではないかと思います。来年以降もこのインターンシップが永く継続されることを願っています。最後に、今回のインターンシップに関わって下さった塚脇先生、アンコール遺跡整備公団の多くの職員の方々、カンボジアでの生活をより実りのあるものにしてくれたカンボジアの人々、そして多くの時間を共に過ごしたインターンシップ仲間全員に感謝をしています。本当にありがとうございました(写真4)。



写真4 . 仲間たちと

#### 4) カンボジアでのインターンシップだからこそ得られたこと

人間社会学域経済学類2年 中谷容子(グループ2)

今回の2週間のインターンシップで、私は「カンボジアでインターンシップをした」からこそ得られるものがたくさんあったと思います。インターンシップ参加前は留学に関しては自分自身には関係のないことだと思っており、絶対にすることはなし、したいと思ったことは一度もありませんでした。また学習に関しては、経済学類なのだから経済や経営のことについて詳しくなり、身に付けて社会に出ることが出来れば良いと考えていました。国際理解への意欲については、もともと日本以外の国の現状や歴史について知ることは興味があり、好きなほうでしたがそこまで積極的に調べるなどするわけではありませんでした。

私は2週間インターンシップに参加し、カンボジアでお世話になった方々からもインターンシップメンバーからもさまざまな刺激を受けることが出来ました。私のグループはカンボジア建築のスペシャリストの方にカンボジアの伝統的な村・集落・土地・家の特徴について教えていただき、その知識をもとにモデルハウス(写真1)や集落に実際行って見学し、より深い知識を得ることが出来ました。また遺跡やエコビレッジ(写真2)の視察にも行き、さまざまな知識を得ました。



写真1. 書いて下さったクメールハウス

私が学んだモデルハウスはクメールハビタットといい、クメールハウスの紹介やクメールの人が行っている魚の養殖・畑などの自給自足の生活の紹介やコンポストの活用などを行っているものでした(写真3)。これは公団の方が土地やそこにある家を提供して行っているもので、ここに行くだけでクメールの人々の暮らしや建築物の特徴などが分かりました。カンボジアの伝統的な村や家などの特徴は日本にないものばかりでとても興味深いものでした。また遺跡を視察する中で、私たち観光客がアンコールワットなどの遺跡を見て純粋に感動し、心から美しいと思うことが出来るのは公



写真2. ルン・タ・エク村にて

団の方をはじめとするカンボジアの方々の努力によって支えられているのだと思いました。それらを支えるカンボジアの方々の技術はとても感心するようなものばかりでした。そして公団の方もそれらの仕事に誇りを持っておられて、私も将来そこまで仕事にやりがいを持つことが出来たらいいなと強く思いました。

カンボジアでの経験により留学に関する考えが変わり、実現できるかどうかは別にして留学してみたいという気持ちが初めて芽生えました。留学して日本とは違う海外での生活をする中で、日本にいただけでは経験できない、何にも代えられない経験が出来るとこの2週間で身をもって感じる事ができました。日本で当然のことが当然ではなかったり、日本では考えられないことがあったりと違いに驚くことがたくさんありました。実際2週間生活



写真3 . クメールハビタットの畑にて

して見て先進国である日本と発展途上国であるカンボジアの違いを実感し、カンボジアから日本が見習わなければならないこと、日本からカンボジアが見習わなければならないことを見つけることが出来たと思います。このようなことは旅行などで数日カンボジアに行くだけでは感じる事が出来なかったと思います。

このインターンシップで心残りなことは、自分の英語力のなさによって公団の方の英語をスムーズに聞き取ることが出来なかったり、伝えたいことや質問したいことを話せなかったりしたことです。また公団の方やカンボジアの方とのコミュニケーションの機会も減ってしまっていたことも心残りです。英語はほとんどの世界で共通の言語であり、大切だと分かっているながら、私は今まで日ごろから英語を勉強するというような努力はしていませんでした。しかし実際海外に行ってみて英語の大切さを実感しました。何より「人と話したい。いろいろ教えてもらいたい。」と思っているのにそれができない現実が悔しかったです。これからは経済や経営の勉強だけではなく、英語の勉強ももっとたくさんの人と会話できるようになりたい、関わりたいと思います。またこのように学びたいと思ったら学べるという自分が置かれている環境にも感謝して、できることややりたいことはやりきろうと改めて感じました。

私はカンボジアに行く前にカンボジアについて調べ、カンボジアのことは多少わかっているつもりでインターンシップに向かいました。しかし実際カンボジアに行ってみると、私が調べたことはちっぽけなことばかりで、現地に行かなければ分からないようなこともたくさんありました。現地の詳しい情報や確かな情報は現地の人や実際行った人にしか分からないことだと思います。日本人はカンボジアという国名を聞くとほとんどの人が地雷や貧しいなどとイメージすると思います。しかし私はカンボジアに行くと、カンボジアの

イメージが変わりました。カンボジアはそのような暗い部分だけではなく、日本にはないような幸せや明るさがある国だととも感じました。この感じたことを私はたくさんの周りの人に伝えていきたいと思っています。そしてこれからカンボジアがどう変わっていくのかも知りたいと思っています。またカンボジアだけでなく、もっといろんな国についても知りたい実際行って感じたいと思いました。



写真4．遺跡修復の前と後

私は2週間、カンボジアの方やカンボジアインターンシップメンバーと関わりとても刺激を受け、さまざまなことを得て、感じる事ができたと思います。充実した2週間であり、自分自身のこれからの生活を充実させてくれる経験になりました。私がこのような経験をする事が出来たのはたくさんの方々の支えや協力があってからだと思います。感謝の気持ちを忘れず、この経験をこれからの学習や生活に生かしていきます。

## 5) カンボジアでの経験から

人間社会学域国際学類 3年 笹田絵美(グループ 3)

私は、8月20日から31日までの平日の10日間、カンボジア国立アンコール遺跡整備公団でインターンシップをさせていただいた。そこで出会ったスタッフの方々や、遺跡内の村に住んでいる人々との交流、また初めて訪れるカンボジアの文化から様々なことを感じた。

私は北パライを中心とした地区の整備をしているチームでお世話になった。そこはまだガイドブックの地図にも載っていないような場所で、観光用に整備しているところであった。私たちは堤防や、村、そしてニャック・ポアンのように有名になってきた寺院から、ほとんど観光客も訪れないような、壊れている小さな寺院まで、いろいろなところを見学させていただいた(写真1)。昔の水路を見に行ったときには、新しい水路を別の場所に造った理由と



写真1. 堤防の見学

して、観光客に昔使われていた水路を見せるためだと聞き、遺跡群の中でも観光客に知ってほしいのは寺院だけではないのだとわかった。それと同時に、その水路の場所が非常に分かりづらい場所であったので、観光客に見せるためにはもっと目立たせる必要があると感じた。

また、私たちは水資源管理部門でインターンシップをさせていただき、遺跡内の水の管理がどれだけ大切か、そして水自体がどれだけ大事なものなのかを実感した。私たちが行ったときには、水を止めていて、水がない状態を見学した。例えばニャック・ポアンにも、本来は5つの池に水がある。私たちは水がない状態を実際に見に行き、ある状態を写真で見せていただいたのだが、景観がまったく違った(写真2)。景観だけではなく、遺跡群の中には人が住



写真2. ニャック・ポアン

んでいるので、生活の上でも水の管理は大きくかかわっていた。水がないと、土が干上がって稲作ができないと聞いた。村の人々にとって、農業は大事な生活の一部であり、それ

ができないと食べるものが減るということであった。

初めて遺跡に行った日の午後、オフィスでチームのリーダーと、遺跡内で行ったところの復習と補足説明をしていただいた。そのときに、リーダーが私たちの遺跡の中で撮った写真だけを見てそこがどこなのかをわかっていたことに私はとても驚き、プロ意識を感じた（写真3）。私たちと一緒に遺跡を回っていなかったリーダーが、あの広い遺跡群の、わたしたちにとっては同じに見えるような、様々な寺院や場所を見分けることができたのは、その遺跡群を



写真3．オフィスで復習

知り尽くしているからであり、遺跡の管理をしている公団の方々にとっては当たり前のことなのかもしれないけれど、やはりアンコール遺跡のプロなのだと感じた。また、これは将来どのような職に就いても共通することであり、常にプロ意識を持ち、自分の仕事に関することは何を聞かれても答えられるような人になりたいと思った。

私たちは遺跡群の中にある村の視察もさせていただいた。世界に2つしかない「人が住む世界遺産」の1つだということで、村の人々がどのように暮らしているのかにはとても興味があった。家の周りでは様々な果物や野菜などを育てていて、自給自足をして暮らしていることが目に見えて分かった。また、ダムを造っている様子を見せていただいたり、遊歩道を通った時に道を整備している人々とも出会った。後から公団の方にダム造りや道の整備をしていた人は、公団が雇った村の住人だということを聞いて、自分が使うものを自分の手で造っているということに驚いた。日本では、ダムを造るのにその周りの住人が協力して造るなどあり得ないことで、専門家がやることである。しかし、アンコール遺跡では公団が男女かかわらず住人を雇い、指導してダムを造らせていた。それも自給自足であり、遺跡の中という簡単には変えられない環境のなかで、その土地についてよく知っている公団と住民が連携して必要なものを造り、自分の手で暮らしやすくしているのだとわかった。また、それは公団と村の住民との信頼関係があってこそできることだと感じた。



写真4．ヤシの実ジュース

カンボジアでは公団の方との会話の中からや、食べ物、交通などで、文化の違いを感じることはほぼ毎日あった。遺跡を1日まわった日には、休憩でヤシの実ジュース

やサトウキビジュースをいただき、初めての経験をした（写真4）。交通面では、自転車とバイクとトゥクトゥクと車が同じ道を同じように走っていて、センターラインもあってないようなもので、日本と比べたら非常に雑だと感じた。文化の面で私が一番心に残っているのが、公団の方に日本とカンボジアの文化の違いを聞かれたときに答えられなかったことである。そのときは、軽く聞かれ、一言で言えるほど単純ではなく、違うことだらけだと思い、具体的に違うところをほとんど言えなかった。そして日本の文化を伝えることができなかつたのが、私の大きな心残りとなった。あれだけ1日に何回も日本と違うところを発見していたにもかかわらず、いざ聞かれたときに英語であったからとはいえ、すぐに説明することができなかつたのが自分にとって一番の反省点であった。これから外国人の方と多く触れ合っていきたいと思っているので、日本の文化や歴史についての知識を蓄え、説明できるようにしなければならないと思った。

カンボジアの人々を見ていて感じたのは、いつも楽しそうに仕事をしているということであった。公団の方々のオフィスの様子を見ていても、村の人々がダムを造る様子を見ていても、仲がよさそうで、笑顔で楽しそうに仕事をされていた。私も将来働いたときに、接客ではなくても笑顔を出せるくらい余裕を持って、楽しく仕事をしたいと思った。

カンボジアに行く前は、不安もたくさんあった。英語圏ではない国で、初めての東南アジアで、途上国で、環境の違いもコミュニケーションも不安でいっぱいだった。しかし行ってみると意外と対応でき、日本とは全く違う環境で生活するのがとても新鮮に感じた。また、多くの日本から来ている学生のボランティア団体とも出会えた。彼らの話を聞き、意識の高い学生が日本にはたくさんいるということを実感した。今回はインターンシップという良い機会に恵まれ、初めての国へ行く勇気が出たので、これからは知らない国でも、海外のいろいろな場所へ積極的に行き、様々な文化を吸収したいと感じた。

## 6) 世界遺産とカンボジアから感じたこと

人間社会学域経済学類3年 熱野華菜(グループ3)

今回、8月18日から9月1日までカンボジアに滞在し、アンコール遺跡公団(アプサラ公団)の水資源管理部門でアンコール世界遺産インターンシップのため10日間お世話になった。もともとアンコール世界遺産には興味があり、世界遺産とそこに住むコミュニティの人々が協力して保護と繁栄をつくりあげていく土地から学ぶことは多くあった。短い間の滞在ではあったが、今後の自分への課題や考えていきたいことを発見できた良い経験であった。

インターンシップでは、北バライのチームに配属された。北バライは、現在その一帯の観光地化を目指している場所で、水資源の管理はほぼ完成してきているのだが、観光地としては整備がまだまだ手を加える必要があり、今回私たちは観光客の目線で北バライの環境やその周辺の村について意見を言うという業務内容であった。業務のあった10日間は、北バライを中心に、運河や川、ダムや閘止め、遺跡や村など多くの場所を視察し公団の方々からアンコ



写真1. ダムの視察

ール世界遺産はもちろんカンボジアの歴史などを教えてもらい意見を言うという日々であった(写真1)。確かに観光地として人を呼ぶにはまだまだ程遠いように感じた。遊歩道はジャングルのもようであったり、インフォメーションセンターが機能していなかったり、道の整備がされていないという状況は改善余地が多くあった。しかし、公団の方々から説明を受けて整備がなされていないことについて納得したこともある。アンコール遺跡では観光客に情報を伝えるための様々な工夫がなされており、例えば、北バライの昔使用されていた大きな堤防があるのだが、これが壊れたままの状態に残されていた(写真2)。新しい堤防が作られ現在使用しているのだが、なぜ、直さず撤去もせず新しい堤防を作ったのかと疑問に思い聞いてみたところ、観光客に昔その場所に堤防があったことを伝えるためそのまま



写真2. 北バライの古い堤防

の形で残してあるということが分かった。「一聞は百見にしかず」ということわざもあるように見せる歴史として情報を発信しているのだ。

世界遺産というだけあり，寺院や建築物の数々はその存在だけで感動を与える深いものであったが，このように公団が中心となり観光客へ歴史や情報を発信していくことで，観光客もアンコール世界遺産についての理解をより深めることができ，遺跡や遺跡の周辺に住む村の方々へ敬意を払うことができる。このような取り組みから観光開発の経緯を学ぶことができ，観光地化に公団と国が一丸となり力を入れていく必要を感じることができた。

カンボジアでの滞在で多くの自分の課題を痛感したが，まず公団の方々とコミュニケーションをとるにあたって，英語力のなさに頭を抱えた。自分の意見を言うにも「この言い方で良いのだろうか」「言いたいことがあるのに英語が思いつかない」などこちらから情報や意見を伝えることがなかなか出来なかった。どれだけ知識があったとしても，どれだけ優れた意見を持っていたとしても伝える媒体である言語を扱うことができなければ何も伝わらないのだ。そのせいでインターンシップ前半は公団の方々と会話さえまともにできない状態が続いた。海外に行くのは初めてではないが，観光とインターンシップでは使う英語の質も違うし，話すに必要な英語量も当然多くなる。仕事に必要な英語でのコミュニケーション力はまだまだ自分には足りず，伝えたいのに伝えられないという歯がゆい思いをした（写真3）。

自分の英語力のなさに嘆いてはいたが，インターンシップで印象的であったことがある。それは，アプサラ公団の方々がとても楽しそうに，かつ前向きに仕事をしていたことだ。年齢の違いに関係なく意見は言い，それぞれがのびのびと働いているように見えた。これは日本とは大きく違うように感じた。カンボジアでの生活で，自らが行動し，また職員が楽しく仕事をする職場でインターンシップができたことで，将来社会に



写真3．公団の方に説明をうける

でることへの悲観も薄れ，どんな状況であっても，明るく考えるのも暗く考えるのも自分次第だと思えることができるようになり，日本に帰ってからも前向きに物事を考えるようになった。これは今回の滞在で得た一番の能力であるように思う。

日本にいた時のカンボジアは「衛生や治安で問題があり危険で，怖い」という勝手なイメージを抱いていたが，自分自身が現地へ足を運んでみてカンボジアのことを知っていくうちに実際はそうではなく，まだまだ問題はあっても，生活するには十分な環境で，日本とは違う言葉や文化は尊敬に値するものばかりであった。勝手なイメージの構築は良くないし，自分で体感して知ることによって自分の価値観が変わっていくのが良く分かった。海外でただ観光するのではなく，インターンシップとして学びにいったことで公団の職員の

方々をはじめとする現地の方々に直接話を伺う機会が多くあり、学ぶ機会が多かった。

インターンシップで学んだこと以外にも考えさせられたことが幾つかある。例えば、カンボジアの経済格差についてである。現在、カンボジアは右肩あがりの経済発展国でもあるが経済格差の激しい国でもあり、アンコール世界遺産で遺跡に住みながら物を観光客に売る売り子や物乞いをする人々を目にし、日本との違いをどの場面でも感じた。遺跡の保護に関して他の国が資金援助や開発援助をしているが、遺跡に関してはもちろん、教育・医療機関などにももっと援助や国際協力が必要だと考えたが、なかなか現状は難しいものであるようにも感じた。日本も援助をしていることを今回カンボジアで職員の方々に説明してもらい初めて知った。自分にはまだ知らないことが多くあり、狭い世界観でしか生きていないのだと思った。もっと視野を広げていかねばならないし、知ることを躊躇しては何も成長しないのだ。

今回の滞在で多くのことを学び考えることができた。これからの残された学生生活で、今回のインターンシップで必要に感じた英語および言語の勉強すること、そしてカンボジアの職員の方々のように楽しく働くこと、日本はもちろん世界の政治や将来に興味をもつことが必要だと感じた。勉強や学ぶことはもちろんだが、インターンシップで学んだことを活かし、これからの大学生活で2つのことを実行していこうと思う。まず先程も述べたが、何事も前向きに考え楽しむことだ。そうやって今回私が公団の方々から感じたように、まわりの人々に良い影響を与えられる人間になりたい。2つ目は、常に学ぼうという姿勢でいることだ。どんな世界においても常に学び吸収していくことが必要であるし、生涯学び続けていかなければならない。学生という学ぶ立場にある自分が、どの場面でも常に学ぶ姿勢でいられるようにしていこうと思う。そうすることで、未知の世界を知ることができるし、狭い価値観も変わっていくであろう。これから社会人となり様々な世界の多くの人々と関わっていくであろうが、常に学ぶ姿勢でいることで相手の存在や文化や考え方を敬うことができるし、まわりに認められ信頼を置かれる人間になりたい。

不安だらけで参加したインターンシップであったが、多様な価値観の人々や空間に触れることができ、またひとつ成長できたように思う。世界を知れば知るほど自分は小さな存在だと感じてしまうが、まずは大学での学習を通して自己の課題を克服していきたい。そしてアンコール世界遺産およびカンボジアの発展を願うとともに、自分が今回の経験をこれからの未来に活かすことで、自分なりの形で社会貢献をしていこうと思う。



写真4．村の子ども

## 7) さまざまな体験をした2週間

人間社会学域国際学類3年 高橋春香(グループ4)

私はこの夏、アンコール遺跡整備公団(以下、アプサラ)でのインターンシップに参加した。今回のインターンシップにあたり、事前にアンコールの遺跡について調べた。アンコールの遺跡というとアンコールワットが代表的なものであるが、遺跡はアンコールワットの他にもたくさん存在していて、その分布域は広い。アンコールインターンシップの説明を聞いたときにそのことを知り、カンボジアを訪れる前に、少なくとも遺跡の名前と場所は知っておこうと考えたからだ。

また、インターンシップの前に、英語の勉強をしておいた。カンボジアの公用語はクメール語だが、インターンシップ先の遺跡公団の人たちは英語を話すと聞き、少しでも英語を理解できるようにするためだった。

私はアプサラで、西バライチームに配属された。西バライは、世界最大の人工貯水池である(写真1~3)。そのチームでのインターンシップを体験して、アンコールの遺跡は本当にたくさんあり、広い範囲に分布していることがわかった。数の多さと分布域の広さは事前に調べてわかったことではあるが、実際に色々な遺跡へ足を運んでみて、アンコールには本当に数多くの遺跡が存在するのだと驚いた。私は2週間の滞在のあいだにいくつかの遺跡を訪れることが出来たが、それでも訪れることの出来なかった遺跡の数の方が多い。遺跡は小さなものから大きなものまで、また、観光地化されているものからされていないものまで、様々なものが存在するので、その全てを訪れるとなるとどのくらいの時間が必要なのかはわからないが、2週間ではとても回りきれなかった。

それほど数の多い遺跡を対象とするアプサラには、遺跡の多さに比例して必然的に多くの仕事が存在する。アプサラの仕事数が想像以上にあったということも、私がインターン



写真1. 西メボンの工事の様子



写真2. 西メボンの工事の様子

シップに参加して発見したことのひとつである。私たちが携わることのできた業務はほんの一部であるが、それでも公団のインターンシップに参加し、どのようなことを公団が行っているのかを少しでも知ることが出来て良かった。

また、諦めずに人とコミュニケーションをとろうとする気持ちが芽生えたことも、インターンシップに参加して良かったと思えたことだ。公団の人たちと毎日、英語を中心に使って会話をしていたが、思うように話せないことも勿論あった。そんなとき私は一生懸命ジェスチャーを使い、なんとかして自分の思いを伝えていた。拙い英語でも通じる、ということは私にとって自信にも繋がった。

また、公団の人たちは英語よりもフランス語を流暢に話す方が多かったので、フランス語を勉強している私は、時折フランス語も交えて会話をしていた。しかし、英語にしてもフランス語にしても、私たち日本人は勿論、カンボジアの人にとっても母語ではない。お互いの母語ではない言語でやりとりが出来るというのは日本には滅多にできない体験であるし、そのやりとりがなんとか通じていると感じられることは本当に嬉しいことだった。今回のこの体験を通じて、私は今までよりも更に言語に対する学習意欲がわいた。今後は、もっと英語とフランス語を勉強し、自分の思いを難なく伝えられるようになるまでになりたいと思う。

職場からは、とても和気あいあいとしている空気が感じられた。公団の人同士の仲がとてもよく、終始和やかなムードだった。しかしながら、当然だが和やかなだけではなく、仕事に対しては公団の誰もが真面目だった。例えば、私が配属された西バライチームが担当する地域にある、まだあまり有名ではない遺跡に観光客を入れるにはどうしたら良いのか、すでにその場所で暮らしている人がいるところを観光地化する際にはどのようにすれば元からあった人々の生活を壊さずに済むか、などといったことを真剣に考えていた。

私は今回のインターンシップを通じてカンボジアに行くことができたことを本当に良かったと思う。公団の人たちをはじめ、カンボジアの人たちはとても温かい人ばかりだった。



写真3 . 西バライとその周辺の地図



写真4 . 西バライチームの方々と

彼らともっとコミュニケーションをとりたいと思い、暇があればクメール語を教えてもらっていた。そしてそこで覚えたクメール語を、どんなに拙い発音であろうと、なるべく使うようにしていた。そのクメール語を理解してもらえ、通じたときの喜びは本当に大きかった。この経験を通して言語に今まで以上に興味がわき、他国の人もっとコミュニケーションをとりたいと思えた。2週間の貴重な経験は、これからの学習や人生に活かしていきたいと思う。

## 8) 2週間、カンボジア生活

人間社会学域人文学類 2年 佐々木香菜(グループ4)

変化というものは止まることを知らない。私はこのインターンシップで、滞在すること、同じものを見続けることの意味やたのしさを知った。2週間外国の一つの都市に滞在するという経験は、私にとって初めてのことであった。最初の数日は、オフィスに向かうとちゅう何回もカメラのシャッターをきったものだったが、慣れてくるとカメラはかばんにしまわれたままになることが多くなった。日を追うごとに「日常」を撮ることが少なくなった。だが、たった2週間のなかだが、私がもう見慣れたとおもった風景のなかにも変化はあったのだ。看板の位置が移動していたり、ハンモックがなくなっていたり。そんな変化を記録できなかったことを、日本に帰ってきた今、私は残念におもう。

ある日、西バライという貯水池にアプサラ公団が手をくわえる前と後で撮影した画像をみせてもらった。私はその時、すでに西バライを訪れて公団の行っている仕事の説明を受けていたが、過去の画像と私の見た風景を比較したときの、その変化に対する驚きは大きかった。西バライは明らかに変わっていた。車で連れて行ってもらった西バライの道の両脇には緑がしげり、人がすっぽり入ってしまう大穴は埋められ、土手は一定できれいな角度であった。



写真1. 西バライの発掘現場

口で説明されただけでは現実感のなかったもの、公団ではたらく人々の仕事というものを、写真と自分の見たものを比較したときにダイレクトにかんじた。どこが、どのように、どれだけ整備されたのかが分かり、その苦勞をおもった。

父とのメールのやりとりからは、街や生活の変化を知ることができた。父の行ったところにはなかった NIGHT MARKET など観光客向けのものがふえた。衛生的なカフェやレストランが並び、iPhone をかばんから出したら店員のお兄さんが Wi-Fi パスワードのメモを差し出してくれた。ホテルでは各部屋でインターネットがつかえる環境が整えられていた。だが一方で、「星がよく見えるだろう」と父はいつてきたが、



写真2. バイクに乗る高橋春香さん

夜になってもホテルや店の明かりがまぶしくて空はあまりきれいではなかった。スーパーマーケットの棚には、クメール語ではなく英語と韓国語が大きくかかれた商品が多くなっていた。

カンボジアに来る以前は、「このインターンでできるだけ多くのものを吸収して、シムリアップはもういいかなとおもうくらい満喫して帰ろう」と考えていたが、今では一日の、数日の、数年の変化をみていきたいとおもうようになった。遺跡の整備・街の整備が行われて、観光地化はさらに進んでいくだろう。そのなかでひとびとはどう生きていくのか、他国との関係はどうなっていくのか、インターンシップ後、カンボジアのこれからがとても気になっている。

このカンボジアの2週間はインターンシップであって旅行ではない。制服着用などの最低限の義務があり、一日のスケジュールに一定のリズムがある。保護された学生の立場にあることを考え、引率者やほかのインターン生に迷惑がかからないよう、まとまりを乱さないよう行動しなければならぬ。毎日オフィスに行くのだから、家族旅行のときのように珍しいものにばかり手を伸ばして体調を崩してはいけない。うかれて翌日に支障をきたしてはいけない。そういった、今までの旅行では考えなかったことを考えさせられた期間だった。自分の体調や気力の維持に気がついた。冒険したいとおもってもなるべく一人歩きをしないよう心がけた。さいわい食欲がなくなることはなかったが、自分の口に合うとおもえるものを食べ、飲み物にいつも以上に気をくばっていた。

街が変わっていくさまをみるたのしみを知ったこと、自分の行動や口にする物にあんなにも気がつけたことは、これがお気楽な1週間程度の旅行などではなく、2週間のインターンシップだったからこそ得た経験だ。普通ではできない体験をカンボジアというすてきな国でできたことに、私は感謝する。

また、インターンシップ中には自分の能力の低さを痛感した。とりわけ語学に関して、会話がスムーズに進まないもどかしさと情けなさを感じ、言葉の大切さを改めておもった。表情や相槌で意思疎通をはかることはある程度可能だったが、自分の意見や疑問をいうとき、もっと語彙があつてうまくいったならどんな



写真3 . 遺跡へ行く途中の給油所



写真4 . ロリュオス村の子ども

に良かったらどうか。フランス語まじりの彼らの英語も、私に単語力があり、発音・聴きとり能力があり、想像力があれば、慣れるまでの時間を短くできただろう。英語を使わざるおえない状況になってようやく、英語学習の必要性を切に感じた。もっとしゃべれていたのならもっと公団の人々の力になれていたかもしれないとおもうと悔しい。やさしく接してくれたことにたいして、じゅうぶんな感謝の気持ちを伝えられたらどうか、伝わっているだろう



写真5．トンレサップ湖

か。私はとてもうれしかったと、とても幸せだったとちゃんとその場で的確に言いたかった。無理をして私たちのために時間をつくる必要はないとしっかり言いたかった。私の言いたいこと、彼らの言いたいことがお互い通じなかった時の彼らの困った顔を見るのがいやだった。母語以外の言葉を用いて感情を伝えることのむずかしさを久しぶりにおもいだした。外国に旅行に行ったときや、英語で長時間話したときにいつも感情を表現できないもどかしさと悔しさを感じてはいたが、しばらくすれば忘れるのが常だった。今回こそは、このおもいを継続させて自身の力にしていきたい。

カンボジアでのインターンシップ。もらったのは、たくさんの思いやり、やさしさ。アプサラ公団ではたらく人たちのような笑顔を、私も誰かに向けられるような人間になりたいと強くおもった。私たちのために時間をつくってくれて、忙しかっただろうに嫌な顔などせずいろいろなところに連れて行ってくれた。彼らの心はゆたかだとおもう。自らのペースを保ち、おおらかな心で人に接する。タ・プロームにはチームのほぼ全員で行ったが、そのときの彼らのはしゃぎよううれしそうな表情、偶然出会った知人の子供を抱いたときの Radina の顔は、きっと忘れないだろう。時間があまったとき、「あそこにはもう行った?」「あそこはいくといいよ」などと声をかけてくれた。私の希望をかなえようとスケジュールを調整してくれたし、見学が中途半端に終わってしまったときは本を貸してくれた。チーム以外の人オオフィスですれちがえば笑顔をむけてくれたし、ほかの部署の人も遺跡で会ったときに声をかけてきてくれた。自分たちは仕事らしい仕事など一切しておらず、ただのお荷物でしかないというおもいがずっとあ



写真6．ハス畑

った私には、そういう彼らのあたたかい態度に出会うたび、受け入れられているというおもいになり、少し救われる気がしていた。公団の人々のこころくばりにふれるたび、申し訳なくもうれしかった。同時に、そういう大人になりたいとおもった。強くてやさしくて、寛容な心をもった大人になりたいとおもった。

あの幸せな2週間で私は忘れたくない、忘れない。おみやげ物屋の店員やトゥクトゥクの客引きを、水上住宅の間をタライで移動する子どもたちを、水漏れする舟でものを売りに来る母子を、アンコール遺跡群のすばらしさを、コンビニ店員からはじめて聞いた“オークン”を、インターン生のやさしさを、アプサラ公団ですごした日々を。そして、ここで得たつながりを大切にしていきたい。

## 6 . チューターの報告 : 3 度目のカンボジア

人間社会学域国際学類 4 年 畠中 瞳 (チューター)

今年度は、昨年度に引き続きチューターとしてこのアンコールインターンシップに参加させていただきました。一昨年から毎年、アンコールインターンシップには参加させていただき、今年に至っては「また畠中か」と言われるようになったことを嬉しく思います。昨年度はチューターが三人いたのに対し、今年は私一人ということで出発前は昨年より緊張していました。しかしながら、いざ始めてみると参加していた元気な学生達のおかげもあり、チューターとしての仕事に奮闘しつつ、とても充実した2週間を送ることができました。

チューターの仕事は、主にインターンシップ業務の補助です。朝は、寝坊した学生がいないかを確認してからオフィスに向かいます。業務直前は、4つのグループがそれぞれ公団の職員の誰と、どこに向かうのか、何時に何処に戻ってくるのかを把握をし、万が一の場合に備えます。全グループを業務に送り出すとしばし自由な時間があります。さすがに3度目ともなると公団の方々も私を馴染みの顔として覚えてくれており、公団の方と世間話をしたり、昨年はオープンしていなかったオフィス内のカフェでランチをとったり楽しく過ごしていました。その後は各グループの業務終了を確認し、毎日夕方には一度全員で集まり簡単なミーティングを行います。この時に学生の表情から疲労を察知することも重要な仕事です。以上が業務に関する主な仕事です。



写真1 . 定番ランチ@apsara

チューターの業務以外では、2年前にインターンシップの学生として携わらせていただいたエコ・ビレッジをグループ1に同行して訪問しました。2年前は、村に完成した家が一軒しかなく家を建設している人の影がチラホラ見えるといった状況であったのに対し、今年は家がずいぶん増え、村に住む人に数を格段に増えています。また、学校などの施設も完成しており、まるで違う土地を訪れた気分でした。是非この村は5年後か10年後に再び訪れて更なる変貌を見てみたいと考えています。

業務後は、2年かけて培ったシェムリアップの楽しみ方を学生に伝えることが仕事でした。食事、マッサージ、ショッピング等はインターンシップを最高のコンディションで行うための重要なエッセンスであることを経験から学んだので、後輩にそれらを伝えました。今年は便利なことに、滞在先のホテルにマッサージのサービスが導入されており、私を含

め多くのメンバーがお世話になりました。また、今年は現地で覚えたクメール語を積極的に使うことに務めた甲斐もあり、マッサージに加えてマッサージをしてくれるお姉さんとの和気あいあいとした交流の場となることも多々ありました。毎年、日本に帰ってきてまず恋しくなるのはマッサージと言っても過言ではありません。どうにか現地でマッサージを覚えて日本で再現しようと試してみましたが、今年もまたマスターすることはできませんでした。来年度以降の参加者の方々にも是非挑戦してほしいと思います。

3度目のカンボジアということで、過去に見たカンボジアとの変化を感じる場面が多々ありました。観光都市としての発展もですが、今年はその結果として現地住民の人々の生活にも変化が垣間見られました。とても小さなことではあるのですが、去年は首都であるプノンペンでしか見られなかった“アングリーバード”というキャラクターがシェムリアップにも普及していたり、滞在していたゴールドンアンコールホテルの近くにある少しリッチな雰囲気のあるラッキーモールが過去2年では考えられない程の人で溢れかえっていたり、など街を見渡して感じる変化はとても興味深いものでした。

変わるものもあれば、変わらないものもありました。それはやはり現地の人の温かさです。アプサラ公園の職員の方々はいつでも私達を温かく迎えてくれます。街の人もいつも明るく、日本とは違い通り過ぎる人の多くが陽気である光景を見ると、シェムリアップに来たんだなあという実感が沸きました。今年も、滞在先のホテルの目の前にある高級ホテルに優雅にお茶をしに行く機会が多くありました。ちょうど ASEAN 経済会議のため、厳しいセキュリティーチェックをしているスタッフの方もすぐに顔を覚えてくれ「また来たのか」と温かい笑顔で迎えてくれ軽い挨拶を交わす、そんなフレンドリーなシェムリアップの人々はこの土地の観光業に勝る魅力だと私は思います。

最後に、私自身一度目のインターンシップよりも2度目、2度目よりも今回の方が学ぶこと驚くことが多くありました。今年参加した学生、そしてこれからインターンシップに参加する学生には、是非一度きりのカンボジアにはしてほしくないと思います。この2年間で世シェムリアップは私の想像を超える速さで変化していました。それを是非ひとりでも多くの学生に体感してもらいたいです。またいきたいな、と思う気持ちを是非行動に移しましょう！



写真2．ナリーさんと

来年からは社会人として働くため、今までのようにインターンシップに関わることはできなくなりますが、プライベートでカンボジアを訪れこの国をもっと好きになっていく予定です。そして、いつかは日本のお菓子をカンボジアの人に食べてもらう、という夢を果たしたいと思います。

## 7. 資料

### 2012年度アンコール遺跡整備公団インターンシップの概要

環日本海域環境研究センター 塚脇真二

#### 1. 参加者

##### (1) インターンシップ学生

松原 綾 (人間社会学域国際学類 アジアコース3年, グループ1)

河合 柚 (人間社会学域学校教育学類 教科教育学コース2年, グループ1)

宮田あゆみ (人間社会学域国際学類 国際社会コース3年, グループ2)

中谷容子 (人間社会学域経済学類 経営・情報コース2年, グループ2)

笹田絵美 (人間社会学域国際学類 米英コース3年, グループ3)

熱野華菜 (人間社会学域経済学類 経済理論・経済政策コース3年, グループ3)

高橋春香 (人間社会学域国際学類 ヨーロッパコース3年, グループ4)

佐々木香菜 (人間社会学域人文学類 フィールド文化コース2年, グループ4)

##### (2) チューター

畠中 瞳 (人間社会学域国際学類 国際社会コース4年)

##### (3) 連絡教員

塚脇真二 (環日本海域環境研究センター・教授, 8月17日~9月5日)

##### (4) 訪問教員

村上清敏 (人間社会学域国際学類長・教授, 8月18日~8月24日)

中村慎一 (学生担当理事・教授, 8月18日~8月22日)

#### 2. カンボジア側受入機関/責任者

アンコール遺跡整備公団(Authority for Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap, Kingdom of Cambodia) / Hang Peou 副総裁兼水管理部門長

#### 3. 各グループの担当業務

グループ1: ルン・タ・エク エコビレッジの整備事業

グループ2: クメール民族センターの観光整備事業

グループ3: 西バライ貯水池の環境保全・観光整備事業

グループ4: 北バライ貯水池の環境保全・観光整備事業

#### 4. 全体日程

- 3月8日(火): 第1回アンコール・インターンシップ実施委員会
- 3月16日(金): アンコール遺跡整備公団と打合せ(シェムリアブ)
- 4月4日(水): アンコール・インターンシップ説明会(国際学類生対象)
- 4月16日(月): アンコール・インターンシップ説明会(全学生対象)
- 4月19日(木): アンコール・インターンシップ募集開始
- 5月22日(火): アンコール・インターンシップ参加学生の書類選考
- 6月9日(土): アンコール遺跡整備公団と打合せ(シェムリアブ)
- 6月15日(金): 第2回アンコール・インターンシップ実施委員会
- 6月20日(水): 第1回アンコール・インターンシップ事前説明会
- 7月18日(水): 第2回アンコール・インターンシップ事前説明会
- 7月20日(水): 第3回アンコール・インターンシップ実施委員会
- 8月18日(土)~9月2日(日): インターンシップ期間(委細は下記)
- 10月22日(月): インターンシップ報告会(総合教育棟 A1 講義室)
- 1月28日(月): インターンシップ報告書の出版

#### 5. 渡航日程

- 8月18日(土): 金沢 - (チャーターバス) 中部国際空港 - (KE758) 仁川空港 - (KE687) シェムリアブ
- 8月19日(日): アンコール遺跡世界遺産公園の見学, 滞在準備など
- 8月20日(月): インターンシップ始業式・各担当者との打合せなど
- 8月21日(火)~8月24日(金): インターンシップ業務に従事
- 8月25日(土): トンレサップ湖見学(午前), 自由行動(午後)
- 8月26日(日): パンテアイスレイ遺跡見学(午前), 自由行動(午後)
- 8月27日(月)~8月30日(木): インターンシップ業務に従事
- 8月31日(金): インターンシップ業務(午前), Hang Peou 副総裁との面談(午後)
- 9月1日(土): 自由行動(午前), 公団職員らとの昼食会, シェムリアブ - (KE688) 仁川空港(9月2日)
- 9月2日(日): 仁川空港 - (KE775) 小松空港 - (チャーターバス) 金沢



## 2012 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ報告書

2012 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ実施委員会

倉田 徹（人間社会学域国際学類）

村上清敏（人間社会学域国際学類）

辻谷友紀（人間社会系事務部学生課人文・国際担当学務係）

塚脇真二（環日本海域環境研究センター）

発行所	金沢大学人間社会学域国際学類 金沢大学環日本海域環境研究センター 〒920-1192 石川県金沢市角間町 TEL (076) 264-5455 / 264-6821 FAX (076) 264-5468 / 264-6844
印刷 発行 印刷所	2013 年 1 月 28 日 2013 年 1 月 28 日 前田印刷株式会社 〒924-0004 石川県白山市旭丘 2-16 TEL (076) 274-2225 FAX (076) 274-5223

